

「帰郷」

マルコの福音書 6:1~6

はじめに

今日の箇所は、イエシュアが弟子たちを連れて、人としてのご自分が育った郷里に帰られた時の出来事です。しかしここでの結末は、一見するとなんと後味の悪い、残念なもののように見えます。何しろどんな病もたちどころに癒し、死人も生き返らせ、悪霊どもや風や湖さえも従わせることができる御方が、ここではその力をほとんど振るうことができなかったという話ですから、たとえそれが事実であっても後世に残したくないような、不名誉な記録です。日本語の聖書では、イエシュアがその力をほとんど行使することができなかった理由が、人々の不信仰の故であるようなかのように描いています。果たして本当にそのようなのでしょうか。もしそうなら、神は人の信仰の援助や後押しがなければ、何もすることができないということになります。私たちの神はそんなにも無力で、一方私たち人の信仰はその神の働きを左右するような、そんなにも力のあるものなのでしょうか。今日の箇所は決してそのような、誤った真理を語っているものではありません。神が神ご自身の御力によって成し遂げられるそのご計画が、ここにも示されているのです。そのような視点を持って、今日もご一緒に読み進んでまいりましょう。

1. 郷里

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:1 イエスはそこを去って郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。

イエシュアは「郷里に行かれた」とあります。他の福音書を見れば、この町の名がナザレであることがわかります。しかしマルコの福音書は、これをあえて「郷里」としています。ここに使われているヘブル語のエレッツ(עֲרֶץ)は本来、創世記 1:1「神が天と地を創造された」で「地」と訳された言葉です。ですからこの箇所はヘブル語では、イエシュアは「地に来られた」とも読めるのです。エレッツ「地」に来られたということは、イエシュアは初め、地ではなく天におられた御方である、ということを示しており、その事実がこの箇所には「型」として表されていると考えられます。これはヘブル語でなければ導き出すことのできない解釈です。

また「弟子たちもついて行った」ともありますが、これは単純にイエシュアが天から地に来られ、弟子たちを集め、彼らを引き連れてこの地上を歩まれた事実を指し示すとも考えられますが、ここで「弟子」と訳されたタルミード(תַּלְמִיד)は、旧約聖書で I 歴代誌 25:8 のみで使われた言葉で、

【新改訳 2017】 I 歴代誌

25:8 彼らは、下の者も上の者も、達人も弟子も、みな同じように任務のためのくじを引いた。

という記述に使われており、「弟子」タルミードとは本来、「上の者、達人」と「同じように任務」に就く者のことであると考えられます。たしかにイエシュアの弟子たちもイエシュアから権威を授けられて、悪霊を追い出したり、病を癒したりと、イエシュアと同様の働きをしましたが、それは部分的であり、神の

ご計画の全体を理解したことによるものではありませんでした。また何より十字架の死と復活という重要な任務には、この弟子たちは一切参加していません。ですからこの「弟子たちもついて行った」という記述に指し示されている「弟子」タルミードとは、実際の弟子たちのことではなく、イエシュアがどのようにこの地上を歩まれたか、働かれたかということを表していると考えられます。それはすなわち、天におられる、「上の者」である御方、父なる神とともに、全く一つになって任務をなす「下の者」の姿です。先の「郷里に行かれた」という記述が、イエシュアが天から地に來られたことを指し示すとすれば、考えられる解釈です。イエシュアの働きはすべてイエシュアご自身によるものではなく、天におられる御父である神の御心によるものなのです。イエシュアは独断で好き勝手に動いておられたのではなく、任務を与えられてこの地に來られたのです。そう考えるならば、この「イエスはそこを去って郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。」という記述には、天から地に來られたイエシュアが、天の御父からの任務を受けて、その御心とともに、み旨のままに歩まれたということが「型」として表されたものであるとも考えられます。

2. 安息日

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:2 安息日になって、イエスは会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。

「この人は、こういうことをどこから得たのだろう。この人に与えられた知恵や、その手で行われるこのような力あるわざは、いったい何なのだろう。」

6:3 この人は大工ではないか。マリアの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄ではないか。その妹たちも、ここで私たちと一緒にいるではないか。」 こうして彼らはイエスにつまずいた。

「安息日」シャバット(שַׁבָּת)は、創世記 2:2 の記述を由来とする、神の御業、ご計画の完了、完成を指し示す日です。その安息日にイエシュアは会堂に集まった人々に「教え始められ」ました。この「教える」という意味のラーマド(לָמַד)は本来、その最初の言及である申命記 4:1 から、神がイスラエルの民にその所有地をお与えになることを指し示す言葉です。

【新改訳 2017】 申命記

4:1 今、イスラエルよ、私が教える掟と定めを聞き、それらを行いなさい。それはあなたがたが生き、あなたがたの父祖の神、【主】があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するためである。

このように「教える」と訳された、聖書で最初のラーマドは、神がイスラエルの民を生かし、神が彼らに「与えようとしておられる地」に入らせ、これを所有させることを指し示しています。この御言葉は未だ成就していません。確かにイスラエルという名の国は存在していますが、今日もなお世界各地に離散し、その地に入っていない、帰還を果たせていないイスラエルの民、ユダヤ人が大勢いるのです。それどころか首都エルサレムをはじめ、イスラエルの各地に異邦人、異教の寺院が建ち並び、上記の御言葉が成就したとは到底言えない状況です。しかし神は必ずこの御言葉を成就、実現されます。それが「安息日」シャ

バットが指し示す、神の御業、ご計画の完成なのです。「安息日になって、イエスは会堂で教え始められた。」という出来事には、その神のご計画の完成が「型」として表されていると考えられます。

3. つまずく

しかしそのようなイエシュアの教えに対し、人々は「驚いて…」、そして「つまずいた」とあります。彼らのこの反応、様子は一体何を表しているのでしょうか。ヘブル語で「驚く」という意味でここに使われているシャーメーム(רָמַם)は本来、土地が「荒れ果てる」という意味で使われた言葉です。

【新改訳 2017】創世記

47:19 どうして私たちが、土地と一緒にあなた様の前で死んでよいのでしょうか。食物と引き替えに、私たちと私たちの土地を買い取ってください。私たちは土地と一緒にファラオの奴隷となります。どうか種を下さい。そうすれば私たちは生き延び、死なずにすみませう。土地も荒れないでしょう。」

47:20 それでヨセフは、エジプトのすべての土地をファラオのために買い取った。エジプト人に飢饉が厳しかったので、人々がみな、自分の畑地を売ったからである。こうしてその土地は、ファラオのものとなった。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルの、11番目の息子であったヨセフがエジプトの宰相であった時の出来事ですが、大飢饉がその地一帯を襲い、人々が食料と引き換えに自分たち自身と土地を差し出しました。ここで「土地も荒れないでしょう」という箇所には聖書で最初のシャーメームがあります。そしてこの言葉は人々が「土地と一緒にファラオの奴隷と」なることを指し示しています。エジプトのファラオはイスラエル史上、最初に彼らを奴隷とした異邦人です。その後もアッシリア、バビロン、メド・ペルシャ、ギリシャなど多くの国々の王がイスラエルの土地と民を支配し、これを奴隷としました。そしてイエシュアが来られた時代は、ローマのカイザルの奴隷となっていました。このように、イスラエルの歴史は奴隷の歴史と言っても過言ではありません。なぜこのような境遇に彼らは置かれたのでしょうか。それは彼らイスラエルが神に逆らったため、あるいはその御言葉を正しく理解しなかったためです。ですからイエシュアの教えに対して人々が「驚いて…」というこの様子には、イスラエルの民の歩み、その歴史的状況が「型」として表されていると考えられます。

また「こうして彼らはイエスにつまずいた」という様子も同様です。ここに使われている「つまずく」という意味のヘブル語カーシャル(כָּשַׁל)は本来、イスラエルの民が神に聞き従わない場合の結果を指し示した言葉です。

【新改訳 2017】レビ記

26:27 これにもかかわらず、なおもあなたがたが、わたしに聞こうとせず、わたしに逆らって歩むなら、

26:28 わたしは激怒をもってあなたがたに逆らって歩み、あなたがたの罪に対して七倍重くあなたがたを懲らしめる。

26:37 追いかける者もないのに、剣から逃れるかのように折り重なってつまずき倒れる。あなたがたは敵の前に立つこともできない。

26:38 あなたがたは国々の間で滅び、あなたがたの敵の地はあなたがたを食い尽くす。

イスラエルの民が神に逆らい続けるなら、彼らは「つまずき倒れ」そして「国々の間で滅び…」という、奴隷よりももっと悲惨な、最悪の状況となることを指し示した言葉、それが本来のカーシャルだと考えられます。実際に A.D70 年、時の大国ローマによって首都エルサレムは陥落し、その象徴であった神殿は跡形もなく破壊され、イスラエルの民は虐殺されます。生き残った人々もその地を追われ、世界中に離散し、以後流浪の民となります。その行く先々で迫害され、殺され、今日もなお、常に異邦人からの危険を感じながら暮らす民、それがイスラエルの民、ユダヤ人です。彼らが今もなお迫害される代表的な理由の一つに、「キリスト殺し」という汚名があります。神の御子イエシュア、イエス・キリストを十字架にかけて殺した忌むべき民として、世界各地の教会、クリスチャンたちから迫害を受けてきました。ですからこの「こうして彼らはイエスにつまずいた」という記述には、イエシュアのゆえにつまずいた、すなわちイエシュアを殺した民とされたがゆえに迫害され、殺されるイスラエルの民、ユダヤ人たちの姿、状況が「型」として表されていると考えられます。

4. 大工

イエシュアの教えを聞いた郷里の人々は、イエシュアが教師や学者ではなく、ただの「大工」であったことが理由でつまずいたことが記されていますが、人々がイエシュアを「この人は大工ではないか」と言った事実にも、重要な意味が示されていると考えられます。この「大工」にはヘブル語で「職人」とも訳されるハーラーシュ(חָרָט)という言葉が使われています。これについての最初の言及は出エジプト記 28:11 です。

【新改訳 2017】出エジプト記

28:11 印章を彫る宝石細工を施して、イスラエルの息子たちの名をその二つの石に彫り、それぞれを金縁の細工の中にはめ込む。

28:12 その二つの石をエポデの肩当てに付け、イスラエルの息子たちが覚えられるための石とする。アロンは【主】の前で、彼らの名が覚えられるように両肩に載せる。

これは、大祭司の身に着けるエポデという特殊な装束の作り方についてのものですが、ここで「印章を彫る宝石細工」という箇所には聖書で最初のハーラーシュが使われています。このように、ハーラーシュとは本来、大工というよりも、宝石に彫刻をする細工職人のことを意味しました。実際にこの当時の家はほとんどが木ではなく石を用いて造られていましたので、イエシュアも大工というよりも石工、石に細工をする職人であったと思われます。しかし本来のハーラーシュは大祭司の着けるエポデの宝石に「イスラエルの息子たちの名を」刻む者であり、その目的は「【主】の前で、彼らの名が覚えられるように」することであったと記されています。ですからイエシュアが「大工」であった事実には、神の御前にイスラエルの名とその民の存在が覚えられ、選ばれていること、イスラエルが神の選びの民、聖なる民であることを示すという目的が表されていると考えられます。

5. マリアの子

また人々はイエシュアを「**マリアの子 (מָרְיָם בְּנוֹתָא)**」とも呼びました。普通はこのような呼び方はしません。イエシュアは人間としては、マリアの夫で大工であったヨセフを父として育ちました。ですから言うならば「ヨセフの子」であるはずですが。これはこの時すでにマリアの夫ヨセフは亡くなっており、マリアがやもめとなっていたことを示すとも考えられますが、血筋、系図を重んじるユダヤ人たちに対してこの考えは不適切です。なぜなら彼らはすでに死んでいる父祖たちを指して自分たちを「アブラハムの子」と言ったりするからです。ですからこの呼び方は、イエシュアが、マリアとその夫ヨセフによって生まれた子ではなかったことが知られていたためだと考えられます。マリアはヨセフの許嫁^{いいなづけ}、まだ結婚していない状態で、聖霊によってイエシュアを身ごもりました。女性が処女のまま妊娠する、このような事は、人には到底理解できないものです。ですからおそらくマリアとヨセフの近親者たちの多くは、二人が結婚していない状態で肉体関係を持ってしまったと理解したことでしょう。そのような非常識、不道徳によって生まれた子として軽蔑、非難する意味をこめて、人々はイエシュアをこのように呼んだと考えられます。

しかし一件誤解とも言えるこの事実にも、重要な意味が表されていると考えられます。それは「**マリア**」という名の持つ意味にあります。旧約聖書ではミリアム(מִרְיָם)と表記されるこの名自体の意味については諸説あり、はっきりしていません。しかしこの名が聖書で最初に記された箇所とそこに記された御言葉については以下のように明らかです。

【新改訳 2017】 出エジプト記

15:20 そのとき、アロンの姉、女預言者**ミリアム**がタンバリンを手に取ると、女たちもみなタンバリンを持ち、踊りながら彼女について出て来た。

15:21 **ミリアム**は人々に応えて歌った。「【主】に向かって歌え。主はご威光を極みまで現され、馬と乗り手を海の中に投げ込まれた。」

これは神がエジプトの奴隷からイスラエルの民を解放するために、エジプトの軍勢を海の中に投げ込み、これを滅ぼされた出来事が起こったその直後のものです。「**ミリアム**」は「**タンバリンを手に**」踊り、歌いました。このタンバリンという楽器はヘブル語でトフ(תוף)と言い、聖書で最初に記されたトフは、ヤコブすなわちイスラエルが父の家、故郷であるカナン^{カナン}の地に帰るために送り出すことを指し示す言葉として用いられました(創世記 31:27)。そしてミリアムがイスラエルの民とともに歌った歌の結びはこうです。

【新改訳 2017】 出エジプト記

15:17 あなたは彼らを導き、あなたのゆずりの山に植えられる。【主】よ、御住まいのために、あなたがお造りになった場所に。主よ、あなたの御手が堅く建てた聖所に。

15:18 【主】はとこしえまでも続べ治められる。

タンバリンを手に、この歌を歌い、踊った存在、それが「**ミリアム**」すなわち「**マリア**」であり、この名に表された神のご計画であると考えられます。つまり人々がイエシュアを揶揄して呼んだ「**マリアの子 (מָרְיָם בְּנוֹתָא)**」という名の中にさえも神のご計画は表されており、それはすなわち神が御子イエシュアをしてイスラエルの民を救い出され、「**彼らを導き**」そして「**ゆずりの山**」、神が「**お造りになった場所**」、

「御手が堅く建てた聖所」に住ませ、「【主】はとこしえまでも続べ治められる」という御言葉が成就されるということであると考えられます。

6. イエシュアの兄弟、そして姉妹たち

またイエシュアの弟たちの名も明示されています。その名に関する意味は以下のように解釈できます。

- ・ヤコブ(יַעֲקֹב)…やはりこの名はアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルの民の存在を連想させます。
- ・ヨセ(יוֹסֵף)…「加える、増加する」という意味のヤーサフ(יָסַף)に由来すると考えられます。
- ・ユダ(יְהוּדָה)…「賛美する」ヤーダー(יָדָה)に由来するとも考えられますが、ユダ族が連想されます。ユダ族はダビデに始まる王の家系です。イエシュアもまたこの血に連なる者としてお生まれになったので、イスラエルの王としての存在を指し示す名と考えられます。
- ・シモン(שִׁמְעוֹן)…「聞く」シャーマ(שָׁמַע)に由来する名と考えられます。

これら四人の名から次のような神のご計画を導き出すことができます。

「イスラエルの民は大いに増え、繁栄し、イエシュアを王とし、この御方にのみ聞き従う民となる。」

そして「その妹たち」について。この存在はイスラエルに繋がる私たち異邦人の教会を指し示すものと考えられます。神のご計画はこのイスラエルと教会をともに「神の国」に入らせ、一緒に住ませることです。それがこの「ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄ではないか。その妹たちも、ここで私たちと一緒にいるではないか。」という言葉の中に、「型」として表されていると考えられます。

7. 初穂

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:4 イエスは彼らに言われた。「預言者が敬われないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」

6:5 それで、何人かの病人に手を置いて癒やされたほかは、そこでは、何も力あるわざを行うことができなかった。

イエシュアはご自分を指して「預言者が敬われない…」と言われました。ここに「卑しめられる」という意味のカーラー(קָלָה)という言葉が使われています。この最初の言及はレビ記 2:14 ですが、本来はこれとは全く違う意味で使われていました。

【新改訳 2017】 レビ記

2:14 あなたが初穂による穀物のささげ物を【主】に献げる場合には、火にあぶった穀粒、新穀のひき割り麦を、あなたの初穂による穀物のささげ物として献げなさい。

これは律法にある「初穂」、収穫した穀物の最初のを神にささげなければならないという規定についてのもですが、ここで「火にあぶった穀粒」と訳されている箇所は聖書で最初のカーラーがあります。

イエシュアはご自分が敬われないことを怒って、あるいは嘆いてこの言葉を言われたのではなく、ご自分の民であるイスラエルの民の手によってささげられる「初穂」のささげ物としてのご自身の存在、役割を指し示して「預言者が敬われないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです」と言われたのだと考えられます。そしてそれはもちろんイエシュアの十字架の死を意味しています。イエシュアはイスラエルの民の「初穂」長子、すなわち代表として、民全体の罪の贖いのために十字架にかかり、そして死なれたのです。この出来事がなければ、たとえ神の民として選ばれていたとしても、罪ある者は救われず、決して「神の国」には入れません。ですからイエシュアは「何も力あるわざを行うことができなかつた」とあるように、ご自分を低くされたのです。

【新改訳 2017】ピリピ人への手紙

- 2:6 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、
2:7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、
2:8 自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。

7. 驚く

【新改訳 2017】マルコの福音書

6:6 イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を巡って教えられた。

先ほどは人々がイエシュアに対して驚きましたが、ここではイエシュアの方が驚いておられます。しかしここで使われている「驚かれた」という意味の言葉は、先のシャームム(רומם)ではなく、ターマ(תמה)という言葉が使われており、この最初の言及は、創世記 43:33 です。

【新改訳 2017】創世記

43:33 彼らはヨセフの前で、年長者は年長の席に、年下の者は年下の席に座らされたので、一同は互いに驚き合った。

この出来事は、ヤコブすなわちイスラエルの十二人の息子たちについてのものです。11 番目の息子ヨセフは、父の溺愛などによって兄たちの妬みを買ひ、エジプトに売り飛ばされてしまいました。しかし神の不思議な導きにより、エジプトでファラオに次ぐ権力者となったヨセフは、自分の正体を隠し、エジプトにやって来た兄弟たちを招き、もてなしたという場面です。事実を知らないヨセフの兄弟たちは、エジプトの権力者が、自分たち兄弟の年の順を完璧に知っていたことにターマ「驚き合った」ということです。ですからこのターマという言葉には、ヤコブの十二人の息子たちを集め、座らせるという出来事が指し示されていると考えられます。「座らせる」という意味のヤーシャヴ(ישב)は本来、「住む」という意味の言葉ですから、このターマにはイスラエルの十二部族を呼び集め、ともに住ませる、という神のご計画が指し示された言葉であると考えられます。ですからこの記述は、イエシュアが郷里の人々の不信仰ぶりにあきれ果てて、彼らを見捨てられたという意味のものではないということです。それどころか、逆にご自分の選びの民を決してお見捨てにならず、不信仰な彼らを憐れみ、救い出し、再び集められるということが

表されているのです。何度も言いますが、これはヘブル語でなければ絶対に導き出せない意味であり、奥義であり、まさにターマ、驚くべき神のご計画です。

このように、イエシュアが郷里に行かれたという、これら一連の出来事もまたすべて、神の選びの民であるイスラエルと、それに繋がる異邦人の教会の救いと、「神の国」についてのご計画を表した「型」となるものであったと考えられます。それがたとえ一見喜ばしくない、好ましくないような状況、言動の中であったとしても、それが表されているのです。この解釈は、神は最も偉大な御方であり、すべてを支配し、すべてをその御手の中におさめ、善も悪も、神の敵対者である悪魔やそれに従う人々でさえも、神のご計画における駒の一つにすぎない、という理解に基づいたものです。つまりすべては唯一の神であるこの御方の御心、み旨のままに動いているということです。私たちの神は、天と地とその中にあるすべてのものを創造され、支配しておられます。たとえまだそのご計画が完成していなくても、この事実は永遠の昔から変わりません。そして必ずやその御心を、聖書に記されたとおりに、一つも違わず成し遂げていかれます。これからもますます、聖書からその事実を教えていただきましょう。そのために教会に集まりましょう。そうしなければ、私たちはすぐに自分の目の前の事ばかりに目を向けて、この偉大な真理から心が離れてしまいます。私たちに与えられている神の選びによる愛は、私たちの状態に関わらず変わりませんが、私たちの側からも、神を見つめ返し続けることができると祈ります。どうかこれからもますます私たちの上に聖霊の助けが与えられますように。